



Title	ヨーロッパの窓・そのかたち
Author(s)	坪井, 源
Citation	デザイン理論. 1991, 30, p. 111-112
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53259
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ヨーロッパの窓・そのかたち

坪井 源

ヨーロッパ各地の建物の“窓”を見てまわって来た。窓はもともと、風に対する防壁であり、明かりを採り入れるための開口部だが、各国の気候、風俗、習慣の違いによって建物同様、さまざまの変化をみせ、尽きぬ魅力がある。

また、16～19世紀ごろの古い建物の窓には、ゴシック、ルネサンス、ロココといった時代的特色が色濃く残り、さらには、キリスト教回教支配の影響といった時の長さがはっきり映し出されているのも面白い。総体に宗教的色彩の最も濃いのがイタリアであり、オーストリア、スイスでは、気候・風俗に影響を受け、ベルギー、フランス、ドイツ、オランダ、イギリスでは慣習や伝統的な手法による影響、また、北欧4か国は、生活の風習、16世紀以後のキリスト教文化の影響が出ているように見えた。

例えば、オーストリアのチロル地方の農家や民家には壁全体に絵が描かれている。その中に窓があって、あたかも立派な窓枠がついているかのように絵で表現されている。実際、窓は無くとも窓の絵が描いてあり、遠くからはほとんど区別がつかない。壁には愛らしい花や、動物の絵や街の歴史が順々に描かれたり、びっくりするようなことになる。これが本当の“飾り窓”なのかもしれない。いかにも風光明媚なチロル地方にふさわしくほほえましい。このようなスタイルはスイスのバーゼル地方の田舎でも見ることができるが、ここでは具体的な絵でなく、色で表現されている。私

が見た窓は、壁全体は緑一色で屋根と窓の間に文字が白と黒の陰で書かれ、木製サッシュまで緑に塗られていた。また、外窓にガラス戸がついていてこれも同じ色で統一されているという具合で、それぞれの民家で色を楽しんでいたようであった。

イギリスのバーミンガムでみたアパートは、150年ほど前の建物で、いわゆる近世の平均的な様式である。入り口が一ヵ所で、窓は左右対になっているが各階の窓の型は異なり、1階は丸味をつけて全体の感じをやわらげ、2階以上は出窓で、ゴシック調である。日本の窓、とくに通風採光を二の次にして、外の様子をうかがうための“無双窓”“武者窓”あるいは格子を組んだ“与力窓”といったものに比べれば、ヨーロッパの窓は総体に、無駄のない機能本位でシンプルな美しさがある。

私が特に興味をもったのは、ベルギーの窓だった。ブラッセルの市内には、ゴシック、ルネサンス様式のほかに、19世紀中ごろフランス、ベルギーを中心に興ったアール・ヌーボーの影響をうけた建物が多くみられた。もともとアール・ヌーボーは、量産化され、個性的なぬくみを喪失していく流れに対抗して、手造りによる人間性の回復を旗印にした運動だけに、それらの建物は、近代建築の間にあって、なお美しい調和を見せている。ブラッセルの中心地やブルージュの中心地では色々の姿のものを見ることができる。

しかしながら、一般のヨーロッパに見る

民家や商屋の建物は、ほとんどが18世紀から19世紀以後のものばかりで、このベルギーの国には比較的多く、集中して残っている。最も中には特別の建物としてゴシック様式の代表的なスタイルである、聖ミッシェル寺院などの13世紀頃の寺院等が残されているが極めて少ない。しかしこの時代の建物や以前のものとなるとほとんど皆無に等しい。このブラッセルの中心に、ゴシック、ルネッサンス、バロックのそれぞれの様式に囲まれた広場があり、文豪のピクトル・ユーゴーが、「世界で最も美しい広場だ」と称したグラン・プラスがある。春から初夏にかけてこの広場では美しい花市がたつ。中世の建築はややもすれば重苦しく、堅苦しいが、自然の美しい草花の市がたつことになれば、心がなごむのである。いかつい建物にはめ込まれた“窓”は各階とも少しづつ大きさや形が異なり、あるものは、上階の窓と一体となっていたり、また、数階まで上に通った窓、それが同じパターンで横に広がりを持ったもの、いずれも、ゴシックあるいはルネッサンスの様式がそのまま窓にも伝わっているのである。写真は、ベルギーの民間アパートで19世紀初期の建築だが、3階と4階の窓が枠で一体化され、一つの大きな装飾になっている。窓枠は木製でペンキで彩色されているが、木とガラスとレンガの調和が見事だった。この3階と4階の窓を一つにつなぐ型は、中世ギルド時代に出た様式といわれている。ギルドのボスたちが、本来、屋根裏部屋でしかなかったところに窓をつけ、下の階の窓とつないで、いかにも、もう一つ階があるように誇示したのである。

このように窓は各国の風俗、習慣、気候、

宗教が時代と共に変化し、ある時は合理主義に徹し、ある時は、文芸復興のごとく、また、人間性の回復などと考えられ、たえず動いている。そこには昔から今日まで人々の生活の様式を伝えてきているし、また、我々が生きてきた証拠として“彼等”も生きてきた証拠として残し残してきたのである。それはその時代のある種のシンボルあるいはサインなのかも知れない。

(つぽい・もと GENデザインプロ)